

乾隆三十六年版

『綴白裘』七編、八編の上梓とその改訂

根ヶ山 徹

一

清代乾隆年間に上梓された『綴白裘』は、玩花主人の手に成る祖本に基づき、錢德蒼が増輯した戯曲選本である。今日、一般に目にするのできる『綴白裘』、例えば乾隆三十九年（一七七四）に完成した金闔寶仁堂梓行本には、崑山腔の戯曲八十六種四百二十六齣、梆子秧腔、梆子亂彈腔、高腔、西秦腔といった地方劇や時調小曲など三十四種七十齣が輯録されている⁽¹⁾。ところが、上述の散齣の数が固定され、定本として行われるに至る過程において、凡そ三次に互る編輯がなされているのである。

第一次は、乾隆二十九年（一七六四）から同三十三年（一七六八）に至る『時興綴白裘』の公刊である。乾隆二十九年に初編、翌三十年（一七六五）に二編、翌三十一年（一七六六）

に三編、翌三十二年（一七六七）に四編、翌三十三年に五編が上梓されている⁽²⁾。

第二次は、乾隆三十五年（一七七〇）、三十六年（一七七二）の兩年に互る既出全五編の改訂、及び六編から八編までの新たな公刊である。先ず、第一段階として、乾隆三十五年、第一次の編輯で公にされた初編から五編までが全面的に改訂された上に『校訂時調崑腔綴白裘』なる名稱に改められ、加えて『新訂時興文武雙班綴白裘六編』も公刊される。續いて第二段階として、翌三十六年に『補訂時調崑腔綴白裘七編』、及び『再訂文武合班綴白裘八編』が公刊される⁽³⁾。六、八の兩編には、崑山腔と共に第一次編輯の全五編に輯録されていたものを含む梆子腔と汎稱される一連の地方劇、高腔、西秦腔の散齣が輯録されている。

第三次は、乾隆三十七年（一七七二）から同三十九年に至

る既出の七編、八編の再度の改編と、九編から十二編までの新たな上梓である。先ず、乾隆三十七年には九編、十編が編輯され、翌三十八年（一七七三）、第二次の編輯で公刊された七編、八編が『重訂崑腔綴白裘七編』、及び『重訂崑腔綴白裘八編』に再編され、崑山腔の専集に改められる。翌三十九年には舊八編の椰子腔と汎稱される地方劇、高腔の散齣を包攝した『綴白裘椰子腔十一集外編』、崑山腔のみから成る『綴白裘時尙崑腔補編十二集』が公刊される⁽⁴⁾。以後、『綴白裘』は、若干の補訂は加えられるものの、基本的に第三次編輯の形を保ちながら版が重ねられるのである。

以上に略述した『綴白裘』定本成立の過程において、原型をとどめぬほどの大規模な改訂が施されたのは、第一次編輯の全五編と、第二次編輯の七編、八編である。これらは、それぞれ第二次、第三次編輯における篇幅の増大化に伴い、公刊後、僅かな年月で完全に元の姿を消すという激動の命運を辿っており、『綴白裘』成書が如何に複雑な経路を経たものであるかを如實に物語っている。

そこで本稿では、『綴白裘』成書の過程、とりわけ過渡的な段階である第二次編輯における『補訂時調崑腔綴白裘七編』『再訂文武合班綴白裘八編』の公刊の経緯と内容、及びこの二編が第三次編輯において再度の改訂を施されるに至った要因について、當時の演劇界の情勢を踏まえながら明らかに

にしようとするものである。

二

第二次編輯の體裁は次のごとくである⁽⁵⁾。初編の封面は缺くが、二編以降には「時興雅調 ○○○○/綴白裘新集/○編 金蘭堂」とあり、二編から六編までの上欄には「乾隆三十五年春鑄」、七編、八編の上欄には「乾隆三十六年新鑄」とある。また、初編冒頭の程大衡「新鑄綴白裘合集序」は「乾隆庚寅（三十五年・一七七〇）季春上浣」なる刊記を有するものの、「玩月（花）主人 向に『綴白裘』を集め、錢子德蒼、搜採し復た増輯し、一にして二、二にして三、今は則ち廣まりて八と爲る⁽⁶⁾」とあること、また程大衡の序文に續けて初編から八編までの總目が置かれていることから、全八編が一套として公刊されたことは明らかである。

ここで、乾隆三十六年に上梓された七編、八編における散齣の輯録状況と、第一次、第三次編輯本との散齣の襲用関係を明らかにしておきたい。尙、第一次編輯の五編については内容未詳のため除外した。

先ず、『補訂時調崑腔綴白裘七編』の内容は以下のごとくである。（冒頭の「開場」「副末」は除き、散齣名は本文に従う。また、第一次、第三次編輯本については輯録編名のみを掲げ、×は未輯録を表わす。以下同様）

編』の序文は、錢德蒼の依頼に應えたものごとくであり、上場の曲を能く輯録したものと評価すると同時に、翻刻本が横行していたことについても指摘する。朱祿建については詳らかにし得ない。

錢君『綴白裘』七集の稿を出だし、予に一言以て諸を首に弁せんことを囑す。…今君每歲『白裘』一冊を輯め、已に六編を成す。其の間節奏の高下、鬪笋の緩急、脚色の勞逸、誠に深く場上の痛癢を得し者有り。

故に一集の出づる毎に、彼の梨園中奉じて指南と爲さざるは無く、壘斷輩の利を圖りて翻刻するを怪しむ無きなり。獨り念へらく、君老いたり、と。精力日々に衰邁を益し、安くんぞ勞神苦思を用ひて、徒に賤丈夫の爲に嫁衣を作さんや。余素より詞曲に工ならず。解人に非ざるを愧づ。繕本の已に剗削に付さるるを聞き、聊か數言を誌し以て君の請に應ぜんとす。而も亦た以て世の濫竿せし者の恬んじて恥を知らざるを愧むるなり(8)。

乾隆三十六年の『再訂文武合班綴白裘八編』冒頭には、文意から推して他ならぬ錢德蒼その人であると思われる鏡心居士の「求作白裘序啓」(版心は「八集尺牘」に作る)が置かれる。彼は消遣のため日常の宴席において採録した戯曲を『綴白裘』と銘打って公刊したところ、意想外にも利益を収めることができた。ところが篇幅が増大するにつれ、既出の

六編までが他人に翻刻されて價值が減じたため、糊口を凌ぎ得ぬほどの苦境に陥った。かくして篋底の鈔録から未編入の散齣を輯め、七編、八編の上梓を企圖した、と言うのである。

茲に溽暑に當たり、綠暗朱明、足下は錦擁碧筩して、日々に二三の知己と詩を賦して暢飲し、曾て一たびも我が襪の故人を念ひしやを知らず。僕年來生計蕭條として、窮愁益甚だし。酒酣の際、博く時腔を采り、聊か以て愁魔を驅遣す。偶と梓人に付すに、意はざりき頗る時宜に合ひ、稍と少しく錙銖を覓め、頼ひに以て口を餉するを得んとは。今友人の翻刻するところと爲りて、搆へし者稀にして値頓に減ず。昨に囊篋に於いて、復た餘劇の若干齣を檢べ得、雞肋惜しむ可く、再び集めて七・八の兩集を爲る。鴻才の巨筆一言に借り以て諸を首に弁せんと欲す。倘し珠璣を吝かにせざるを蒙らば、以て價百倍に増すを得、曷ぞ銘感に勝へざらん(9)。

該書はこれに續けて蕉鹿山人の「答」(版心は同様)を掲載する。蕉鹿山人については未詳であるけれども、錢德蒼の需めに應じて書かれたものであるため、彼に對する褒辭、同情、激勵が連ねられている。

昨は來教に接し、八集の紋を爲るを囑せらる。足下の輯めし所の六集は、新たに出だせるものにして已だ裁ける

には非ずと雖も、然れども搜羅去取し、冷熱を派列して、亦た頗る一翻の心血を費せり。聞くならく、近ごろ利を圖りし小人の翻刻するところと爲り、蠅頭、頓に減ず、と。自己の神思を竭くし、臯鏡の饑腹に資するは、已だ君が爲に憤懣髮指するに勝へず。何爲れぞ載ぬるに七・八集の擧有るや。此れ僕の未だ解せざる所なり。大凡、酒肉の交、利を見れば則ち情理を顧みる罔きは、猶ほ娼妓園童、財盡くれば則ち疎んじて異とする無きがごとし。六集、既に翻らるるに、七・八、何ぞ再び刻することの難からんや。吾子、猶然妮妮として、甘んじて車を下りし馮婦と作る、何ぞ愚戇たること此の若くならんや。原稿、璧を歸さん、菟菟の吝を見はすを以て罪と爲す勿れ⁽¹⁰⁾。

以上のごとく、乾隆三十六年の時点における『綴白裘』七編、八編は、編者錢德蒼が口を糊することを主たる目的として編輯、上梓されたものであった。

因に、翻刻本について贅言しておくならば、乾隆四十二年（一七七七）、武林鴻文堂⁽¹¹⁾の校訂重鐫に係る『綴白裘』二編の封面上欄には「乾隆三十五年夏鐫」、三編から六編までの封面上欄には「乾隆三十五年春鐫」なる刊記が遺されており、まさしく上掲の三篇の文章に言う「蠅頭」を減ぜしめた「翻刻」本であると思われる。

一方、第三次編輯においては、如何なる態度で臨んでいるのか。『重訂崑腔綴白裘七編』に附される乾隆三十九年の周家璠の手に成る序文には、先行の七編が再び翻刻されることを憂慮し、改訂を施して新たな七編を編輯したと言う。

『綴白裘』の作や、蓋し演劇の緩急を調ふる所以は、梨園子弟の爲に其の勞逸の宜しきを均ふるのみ。余素より宮商を諳んぜず、是の編の詞義を翫ぶに因りて、文質或勝の弊無く、殊に詞曲の時中爲る可く、優伶輩皆な奉じて以て歸と爲す可き者なり。曩時、本と六集の後に再び一集を編まんと欲す。坊人の竟に七集を以て余に示すを期せず。因りて竊かに其の回心を有すを得しを快とす⁽¹²⁾。

周家璠も詳細は明らかではないけれども、錢德蒼と餘程近い關係にあったものと見え、『綴白裘』の置かれた情況について充分に知悉している。

續く『重訂崑腔綴白裘八編』冒頭に附される乾隆四十年（一七七五）の晴浦居士による「綴白裘新集八編序」においては、改編の経緯については言及していない。

尙、現行の『綴白裘』、例えば乾隆四十六年（一七八一）の四教堂梓行本⁽¹³⁾の「綴白裘七集序」は、乾隆三十六年版の朱祿建序が費用されるけれども、前掲の「壘斷輩」以下の剽竊に係る箇所は刪去され、「誠に風騷の餘事なり」なる一文

に置き換えられている⁽¹⁴⁾。また、許永昌の手に成る「綴白裘八集序」には、前掲の鏡心居士と蕉鹿山人の往復書翰や晴浦居士の序文は登載されず、第三次編輯に即した新たな内容に改められている。

四

第二次編輯の『綴白裘』七編が崑山腔の、八編が崑山腔とその他の地方劇の選集であることは既述のとおりである。

該書は實際の上演を記録したものであることから、崑山腔では白の増大や曲の増刪といった原作脚本に著しい變改が加えられたものが存する。また、蘇州で編まれたものであることから、崑山腔と地方劇とを問わず、道化役の丑、端役の付(副)の白に吳語(蘇白)が混入されていることも顯著な特徴である⁽¹⁵⁾。

これとは別に、八編については、六編に續いて、當時、巷間で練り廣げられていた雅部、すなわち傳統的な崑山腔の戲曲と、花部、すなわち新興の聲腔に乗せたその他の地方劇との交替に影響され上梓されたものと考えられる。このことは、六編を「文武雙班」、八編を「再訂文武合班」⁽¹⁶⁾と稱し、崑山腔とその他の地方劇を均しく輯録していることから充分に推測が可能である。

實際に『綴白裘』所收の散齣に就いて見ると、崑山腔につ

いては各編ともに作品名、散齣名が記されているけれども、その他の地方劇については、八編では椰子腔、高腔なる聲腔名と散齣名、もしくは作品名と散齣名が表示されている。乾隆三十五年版の六編凡例には、俗に椰子腔と汎稱される聲腔が、椰子秧腔と椰子亂彈腔の二聲腔を意味しており、『綴白裘』では前者を椰子腔、後者を亂彈腔と呼ぶ、と定義されている⁽¹⁷⁾。

椰子秧腔は、即ち崑弋腔なり。椰子亂彈腔と俗に皆な椰子腔と稱す。是の編中 凡そ椰子秧腔は則ち椰子腔と簡稱し、椰子亂彈腔は則ち亂彈腔と簡稱し、以て混淆を防ぐ。

孟繁樹氏によれば、崑弋腔が安慶に流入し、秦腔と融合するに際して、崑弋腔を主體とする椰子秧腔と、秦腔を主體とする椰子亂彈腔に分化したものとごくである⁽¹⁸⁾。すなわち、長短句から成る曲牌聯套體の形式をとる樂曲系演劇である崑山腔と、同じく基本的には樂曲系演劇でありながら齊言句から成る詩讚體の滾調を含んだ板式變化體形式の詩讚系演劇であり、萬曆年間以降、皖南において盛行した弋陽腔系統の青陽腔や徽州腔とが融合して生み出された崑弋腔が、恐らく山陝商人によって齎された山西・陝西の詩讚系土腔である秦腔の影響を受けて、いずれも板式變化體の色彩の濃厚な椰子秧腔、椰子亂彈腔なる新たな聲腔へと生まれ変わったので

ある。

そこで、八編に輯録される十種二十齣の地方劇のうち、第二次編輯に至って新たに輯録された九種十七齣について、上掲の六編凡例の定義に添って椰子秧腔、椰子亂彈腔の二腔に分類し、唱腔の組成を検證すると以下のようである¹⁹⁾。

先ず椰子秧腔と認められる五種八齣では次のごとくである。

「千集」の「打麵缸」は【引】、【椰子腔】、【引】、【小曲】、【西調寄生草】四曲、【西調】、【包子帶皮鞋】、【吹調】から成る。ここでは、時調小曲の【小曲】、【西調寄生草】、【西調】、弋陽腔系統の【吹調】²⁰⁾も含むけれども、【椰子腔】の一部には七言齊言體が見られる。

「長集」の「講師・斬妖」は【急板令】、【高腔】、【京腔】三曲、【尾】から成る。【急板令】は崑山腔の曲牌であり、【高腔】、【京腔】は弋陽腔系統の唱腔であることからすれば、曲牌の聯綴形式から成る散齣である。

「長集」の「逃關・二關」は【引】、【急板令】、【椰子腔】四曲、【批子】、【夜夜游】、【批子】、【京腔】四曲、【尾】から成る。【椰子腔】二曲目の副の唱う四句は七言句から、他は長短句と七言句とが混在している。また、【批子】は別名【抜き】とも言い「椰子」の音轉と言われ²¹⁾、【急板令】、【夜夜游】は崑山腔の曲牌である。

「春集」の「戲鳳」は【椰子腔】九曲、【尾聲】から成る。唱腔の組成からすれば板式變化體と言ひ得るが、曲辭は長短句と七言句が混在し、未だ完全なものではない。

「春集」の『蜈蚣嶺』「上坂・除盜」は【椰子腔】、【引】、【椰子點絳唇】、【水底魚】、【包子令】、【吹調】二曲、【尾】から成る。唱腔には純粹に七言句から成る【椰子腔】、弋陽腔から轉化した【吹調】等の他に、崑山腔の【水底魚】、崑山腔が椰子腔化した【椰子點絳唇】が含まれており、やはり樂曲系演劇と詩讀系演劇とが同居している。

次に椰子亂彈腔の二種四齣では以下のごとくである。
「古集」の「磨房・串戲」は【亂彈腔】、【引】、【高腔】二曲、【急板令】二曲、【清江引】、【哭相思后】から成る。【高腔】は弋陽腔の、【清江引】は崑山腔の曲牌であり、曲牌聯套體からは脱していないが、【亂彈腔】は長短句と七言句が混在している。

「春集」の『快活林』「鬧店・奪林」は【梨花兒】、【吹調】四曲、【秦腔】二曲、【四邊靜】、【秦腔】二曲、【尾】から成る。崑山腔の曲牌である【梨花兒】、【四邊靜】、弋陽腔系統の【吹調】も含むが、椰子亂彈腔の主體となった【秦腔】も混在しており、やはり完全ではない。

尙、「千集」の「看燈・鬧燈・搶甥・瞎混」は、【燈歌】二曲、【引】二曲、【燈歌】、【寄生草】二曲、【引】、【燈歌】二

曲、【寄生草】七曲から成り、唱腔に椰子腔、亂彈腔を含まない。目錄、版心ともに椰子腔と題するけれども、時調小曲の一種と認められる。

この他、高腔と明示される「古集」の「借靴」は【梨花兒】、【高腔】六曲、【尾】、【高腔】、【尾】から成る。

以上のごとく、八編に輯録された地方劇は、いずれも長短句から成る曲牌を含みつつ、齊言體の部分をも併せもつという形態であることからすれば、曲牌聯套體から板式變化體への、まさしく過渡的段階に位置するものと認められよう。

これらは、いずれも乾隆三十九年に編まれた地方劇の專集である『綴白裘椰子腔十一集外編』に編入されている。十一集外編全二十一種四十八齣のうち、十一種二十八齣は第三次編輯に至って新たに輯録されたものである。

椰子秧腔では、「堆仙」「上街・連相」「別妻」は未だ曲牌聯套體から脱しきっておらず、「猩猩」には椰子腔化した崑山腔【椰子山坡羊】二曲と、一部に齊言體を含む【椰子腔】を、「趕子」は【引】と【批子】五曲を、「繳令・遣將・下山・播糧・大戰・回山」は崑山腔【點絳脣】【四邊靜】の他に【批子】【吹調】等を含み、「私行・算命」は【吹調】十曲が、「擋馬」は【吹調】七曲が中心となる。椰子亂彈腔では、「借妻・同門・月城・堂斷」は【亂彈腔】九曲のみから成り、三曲、四曲、九曲目の一部に七言齊言體が見られ、「斬

貂」の【亂彈腔】の一部は十言齊言體から成る。「番鬻・敗虜・屈辱・血疏・計陷・亂箭・哭夫・顯靈」は崑山腔【點絳脣】【八聲甘州】【風入松】等も含むが、【亂彈腔】九曲のうち四曲目には七言、十言が混在し、五曲目の一部は七言から成っており、同時に【椰子腔】も含む。この他、「別妻」は崑山腔系統の曲牌聯套體から成る。

このように十一集外編では八編に比して齊言體が多く用いられてはいるが、やはり長短句の曲牌との混在である。

六編について見ると、第一次編輯の四編から編入された「探親・相罵」、六編において新たに輯められた「過關」が時調小曲、「搬場拐妻」が西秦腔である他は、椰子秧腔では「思凡」「安營・點將・水戰・擒么」が崑山腔系統の曲牌聯套體、「途歎・問路・雪擁・度叔」は椰子腔化した崑山腔の曲牌を含み、「買胭脂」「落店・偷雞」と三編から編入された「花鼓」は長短句を含む【椰子腔】を、『青塚記』『送昭・出塞』には崑山腔や弋陽腔を含んでいる。椰子亂彈腔では三編からの「陰送」に長短句を含む【亂彈腔】が見られる。

因に、崑山腔の散齣においても、例えば二編『繡襦記』『入院』に【亂彈腔】、五編『一文錢』『燒香』に【高腔】、同『羅夢』に【弋陽調】、七編『麒麟閣』『反牢』に【姑娘腔】といった新興の唱腔が混入され、四編『玉簪記』『挑琴』に【琴曲】のごとき時調小曲が添加されるものも存する。

唱腔だけからの分析ではあるけれども、以上のごとく、梆子腔と汎稱される地方劇においては、六編において全く見られなかった齊言體が、八編、十一集外編へと編輯が進捗し、輯録される散齣の数が増加してゆくに つれて多く含まれてはいる。しかしながら、いずれの散齣も、崑山腔のような曲牌聯套體と梆子腔や亂彈腔といった板式變化體を包攝した、いわば過度的段階に位置するものである。

五

ところで、『綴白裘』において、崑山腔以外の地方劇を輯録したのは何ゆえであらうか。

花部の戯曲は主として巷間で行われ、俚俗なものであったにもかかわらず、讀書人階層にあっても心を寄せる者が現われる。例えば、『秦雲擲英小譜』の嚴長明「小惠寶兒・喜兒」の條には、當初は崑山腔に心酔していた筆者が、洛陽で秦腔の俳優小惠の演唱を聴き、心を惹かれるに至った、という記事が遺されている。

一日、田商山太守の署に小集す。商山は久しく隴右に官たりて、耳秦聲なに熟れ、余を引まきて共に之を欣賞す。余苦顛を以て胸辭す。小惠故に余と習れ、間に乘じて請ひて曰く「君固より曲を識り眞を聴く者、乃ち亦た復た爾るや」と。叩ふに故を以てすれば、曰く「君

試みに志を抑へ暫らく之を傾聽せよ、數闋而後、仍りて耳に入らずと以爲はば、某等を麾ほひ去らしむるとも未だ晚おそからざるなり」と。心に之を異とし、曰く「子姑く長ずる所を出だし以て試みよ」と。場に登り看るに比べ、甫めて聲を發するに、小異を覺へ、再び之を聽けば、其の聲、清らかにして揚たかく、商調に中たる。頃ほど有りて羽に換はり宮に移り、穿絲咽革、纏肩繞腕、變態無方、一日夜を盡くして始めて其の技を畢まふ⁽²²⁾。

同書の曹仁虎「三壽」冒頭に「余引寓青門、於丁酉（乾隆四十二年）七月、遇三壽於田商山太守署中」とあることから、上掲の一文も恐らく乾隆四十年前後の事と思われる。ともあれ、梆子腔等の新興の聲腔は、崑山腔の主たる觀客階層であった讀書人にとっても、その存在價值を認めざるを得ない程のものであった。

また嘉慶二十四年（一八一九）の敘を有する焦循『花部農譚』には、年少時の農村での觀劇について次のように記している。

余幼時 先子に隨ひて村劇を觀るを憶ふに、前一日『雙珠』『天打』を演じ、觀る者之を視て漠然たり。明日『清風亭』を演じ、其の始め切齒せざるは無きも、既にして大いに快しとせざるは無し。鑼鼓既に歇やみ、相ひ視て肅然として、戲色有る罔し。歸りて稱説し、旬

を汲りて未だ已まず。彼の花部の崑腔に及ばずと謂ふ者、鄙夫の見なり(23)。

焦循は乾隆二十八年(一七六三)、江蘇甘泉の生まれであることからすれば、この紀事は恐らく乾隆四十年前後の江南における花部の様相を傳えたものと思われる。

こうした経験を踏まえて、焦循は崑山腔を厭い、花部の戯曲を愛好するに至るのである。『花部農譚』敘には言う。

梨園は共に吳音を尙ぶ。花部なる者は、其の曲文 俚質にして、共に稱して亂彈と爲す者なれども、乃ち余 獨り之を好む。蓋し吳音は繁縛にして、其の曲 極めて律に諧ふと雖も、而れども聽く者をして未だ本文を覩ず、茫然たらざる無く、謂ふ所を知らざらしむ。：花部は原と元劇に本づき、其の事 忠・孝・節・義多く、以て人を動かすに足る。其の詞 直質にして、婦孺と雖も亦た能く解す。其の音 慷慨にして、血氣 之が爲に動盪せらる。郭外の各村、二・八月の間に於いて、逃たかひに相ひ演唱し、農叟・漁父・聚まりて以て歡を爲すこと、由來久し(24)。

以上のごとく、從來、崑山腔の主たる受容者階層であった讀書人からして、花部の戯曲に傾倒する者が現われたことは、識字階層を対象として『綴白裘』を編んだ錢德蒼にとつて、看過すべからざる事態であつたらう。かくして、第二次

乾隆三十六年版『綴白裘』七編、八編の上梓とその改訂(根ヶ山)

編輯において「文武雙班」「文武合班」と銘打つ六編、八編が上梓されて、崑山腔のみならず花部にもかなりの篇幅を割くに至り、更に第三次編輯においては十一集外編のごとく花部の専集が上梓されたのではないか。

事實、この間の事情については、編者錢德蒼自身の言説ではないけれども、程大衡、葉宗寶、許苞承が能く代辯している。

先に掲げた第二次編輯版の冒頭に附された程大衡「新鐫綴白裘合集序」においては、如何にも讀書人的見地からの立言ではあるけれども、崑山腔には忠孝の褒揚、その他の地方劇には警愚の效用を認めている。

其の中の大排場は、褒忠揚孝、實に人をして善を爲し惡を去るに勉めしむる、濟世の良劑なり。小結構の梆子秧腔は、乃ち一味ひとすぢに挿科打諢、警愚の木鐸なり(25)。

同じく『新訂時興文武雙班綴白裘六編』に附される葉宗寶の乾隆三十五年の序には、崑山腔は讀書人階層を、その他の地方劇は庶民階層を対象としたものであるけれども、時勢に抗うことが適わず、これらを均しく輯録していると明言する。

余 因りて是の編を披ひらきて之を閱するに、其の類に二有るを知る。一は則ち叶律和聲、俱に宮商徵角を按じ、而も音節たが差はず。一は則ち抑揚婉轉、佐たすくるに擊竹彈絲を

以てし、而も天籟自然。文人學士に宜しき者、之れ有り、庸夫愚婦に宜しき者も亦た之れ有り、是れ誠に高下共賞の妙有りて、之を『白裘』五集に較ぶるに頓に改觀を覺ゆ。則ち六集の擧、勢ひとして已むを容さざるなり(26)。

また、『綴白裘椰子腔十一集外編』に附される乾隆三十九年の刊記を有する許苞承の「綴白裘外集跋」には、上掲の程大衡序、葉宗寶序を更に敷衍する。先ずは歴史的な故事に基づく崑山腔の散齣は憂心、憤懣を抱かせる弊があることを指弾した後に、椰子腔の場合は、情節も登場人物も全て假構に屬し、内容は鄙陋であるけれども、欣快を稱え得るとして賞賛する。

若し夫れ弋陽椰子秧腔は則ち然らず。事は皆な其れ徴する有らず、人は盡くは考ふ可きに屬せず。時に鄙俚の俗情を以て、當場の科白に入る有り。一たび甞甞に上れば、即ち捧腹に堪へん。此れ殆ど東烘(坡)の相ひ對して襟を正し肘を捉へ、正に爾れ昏昏と睡らんとを思ひしに、忽ち一談諧訕笑の人を得しが如く、我が爲に羯鼓もて穢を解かん。其れ快きこと當に何如にすべきや(27)。

因に、乾隆四十年頃の著作と覺しい李調元『劇話』巻上に「俗に傳ふ、錢氏『綴白裘』外集に秦腔有り、と」と言つて、上掲の許苞承序の後半部分を引いた後に、「其の論も

亦た確かなり」(28)と崑山腔以外の地方劇の有用性を首肯している。

六

以後、『綴白裘』は乾隆年間に限っても、乾隆四十二年の鴻文堂梓行本、同四十六年(一七八二)の四教堂梓行本、集古堂藏板、共賞齋藏板、同四十七年(一七八二)の學耕堂梓行本、同五十二年(一七八七)の増利堂梓行本、博雅堂梓行本等が行われる。鴻文堂梓行本は寶仁堂梓行本を忠實に翻刻したものであるけれども、それ以降の版本では僅かな改訂が施される。例えば四教堂梓行本では初編順集の『水滸記』『殺惜』『活捉』が二集三卷に、二編河集の『倒精忠』『刺字』が六集二卷に、六編樂集の『盤陀山』『燒香』『羅夢』が五集三卷に移され、二編河集の『倒精忠』『草地』『敗金』『獻金橋』、五編妙集の『清忠譜』『訪文』『罵祠』が刪去され、新たに初集四卷に『紅梨記』『賞燈』が増入される。

また、『綴白裘』と同趣向のものとしては、乾隆五十七年(一七九二)から同五十九年(一七九四)にかけて公刊された葉堂『納書楹曲譜』を掲げることができる。該書は工尺譜を附す曲譜であり、『綴白裘』のごとき散齣を輯めた戲曲選本ではないけれども、「時劇」として外集卷二に「思凡」「小妹」「羅夢」の三齣が、補遺卷四に「來遲」「孟姜女」「崔鶯

鶯」「閨思」「閨怨」「懷春」「金盆撈月」「醉楊妃」「私推」「僧尼會」「夏得海」「昭君」「小王昭君」「琵琶詞」「蘆林」「踏鞞」「磨斧」「借靴」「拾金」「花鼓」の二十齣が輯録されている。

ともあれ、以上に縷説したように、乾隆三十六年に上梓された第二次編輯の『補訂時調崑腔綴白裘七編』、『再訂文武合班綴白裘八編』は短期間で解體され、この二編に輯録されていた散齣の大部分は、第三次編輯の七編、八編、十一集外編に吸収される。編者である錢德蒼自身、また彼に近しい人物は、改編の主たる要因として翻刻本の横行による困窮から脱するためとするけれども、やはり當時の演劇界における聲腔交替、とりわけ椰子秧腔、椰子亂彈腔自體の變容や位置づけの變化、更に讀書人階層の花部の戲曲の愛好等の様々な情勢が綯い交ざって、篇幅の増大化を企圖せざるを得なかったのではないか。崑山腔のみならず、當時の演劇界に新興の聲腔として確固たる地歩を占め始めた地方劇を混在させ、「文武合班」と銘打った八編が、次なる十一集外編において地方劇の專集へと姿を變えていることが、何よりの證左であろう。すなわち、第二次編輯の七編、八編は、我々に『綴白裘』定本成立の過程を知らしめてくれるだけではなく、椰子腔と汎稱される地方劇の發展や勢力擴大、その土庶を問わぬ滲透の様相を示唆してくれるという點で、戲曲史上、極めて貴重な

存在である。

注

(1) 十二編のみは北京大學圖書館古籍善本室藏本に、他はその忠實な翻刻本である國立公文書館内閣文庫藏の乾隆四十二年校訂重鐫「武林鴻文堂梓行本」による。

(2) 初編のみ「善本戲曲叢刊」第五輯（臺灣學生書局、一九八七）景印本により、他は穎陶氏「談綴白裘」（『劇學月刊』第三卷第七期、一九三四）の記述に従った。五編については破損が甚だしいごとくであり内容は未詳である。尙、吳新雷氏「舞臺演出本選集『綴白裘』的來龍去脈」（『中國戲曲史論』、江蘇教育出版社、一九九六。原載『南京大學學報』一九八三年第三期）、顏長珂氏「讀『再訂文武合班綴白裘八編』書後」（『中華戲曲』第四輯、一九八七）は四編までとする。

(3) 前掲注(2) 吳新雷氏は六編までを第二次編輯、十二編までを第三次編輯とし、同じく顏長珂氏は六編までを第二次編輯、十編までを第三次編輯、十二編までを第四次編輯とする。尙、穎陶氏は本稿で取り扱う第二次編輯の七編、八編は未見のごとくである。

(4) 寶仁堂梓行本については前掲注(1)のごとくである。編輯の經過については前掲注(2) 吳新雷氏、顏長珂氏論文を参照した。

(5) 九州大學文學部藏本。

(6) 原文は「玩月主人向集『綴白裘』、鏡子德蒼搜採復增輯、一而二、二而三、今則廣爲八」。

- (7) 前掲注(2) 吳新雷氏、顔長珂氏論文によれば、封面には「舊八集梆子腔俱換入此集」とあるごとくである。
- (8) 引用箇所を含む全文は「錢君出『綴白裘』七集稿、囑予一言以弁諸首。原夫今之詞曲有兩、有案頭、有場上。案頭多務典博、矜綺麗、而於節奏之高下、不盡叶也。鬪筭之緩急、未必調也。脚色之勞逸、弗之顧也。若場上則異是、雅俗兼收、濃淡相配、音韻諧暢、非深於劇者不能也。流水高山、知音安在。『陽春白雪』、顧曲伊誰。其所由來者久矣。今君每歲輯『白裘』一冊、已成六編。其間節奏高下、鬪筭緩急、脚色勞逸、誠有深得乎場上之痛癢者。故每一集出、彼梨園中無不奉爲指南、無怪壘斷輩之圖利翻刻也。獨念君老矣。精力日益衰邁、安用勞神苦思、徒爲賤丈夫作嫁衣哉。愧余素不工詞曲、非解人。聞繕本已付剞劂、聊誌數言以應君請。而亦以愧世之濫竿者之恬不知恥也。」
- (9) 原文は「茲當溽暑、綠暗朱明、足下錦擁碧簫、日與二三知己賦詩暢飲、不知曾一念我襦襖故人乎。僕年來生計蕭條、窮愁益甚。酒酣之際、博采時腔、聊以驅遣愁魔。偶付梓人、不意頗合時宜、稍得少覓錙銖、賴以餬口。今爲友人翻刻、搆者稀而值頓減。昨於囊篋、復檢得餘劇若干齣、雞肋可惜、再棄爲七八兩集。欲借鴻才巨筆一言以弁諸首。倘蒙不吝珠璣、得以價增百倍、曷勝銘感。」
- (10) 原文は「昨接來教、囑爲八集校。足下所輯六集、雖非新出已裁、然而搜羅去取、派列冷熱、亦頗費一翻心血。聞近爲圖利小人翻刻、蠅頭頓減。竭自己之神思、資臬鏡之饑腹、已不勝爲君憤激髮指。何爲載有七八集之舉焉。此僕之所未解也。」
- (11) 前掲注(1) 國立公文書館内閣文庫藏本。
- (12) 原文は、「綴白裘」之作也、蓋所以調演劇之緩急、爲梨園子弟均其勞逸之宜耳。余素不諳於宮商、因旣是編之詞義、無文質或勝之弊、殊可爲詞曲之時中、優伶輩皆可奉以爲歸者也。曩時本欲於六集後、再編一集、不期坊人竟以七集示余、因竊快其得有同心」。
- (13) 九州大學附屬圖書館六本松分館演文庫藏本。
- (14) すなわち「故每一集出、梨園中無不奉爲指南、誠風騷之餘事也」に作る。
- (15) 蘇白を用いる脚色とその効果については、岩城秀夫氏「南戲における吳語の機能」(『中國戲曲演劇研究』第二部「宋元明の戲曲演劇に關する諸問題」、創文社、一九七三。原載『日本中國學會報』第五集、一九五三)に夙に指摘がある。
- (16) 乾隆五十年(一七八五)の自序を有する安樂山樵『蕪蘭小譜』卷之四「雅部」には、「昔保和部、本崑曲、去年雜演亂彈・跌撲等戲、因購蘇伶之佳者、分文・武二班」と言う。
- (17) 孟繁樹氏『中國板式變化體戲曲研究』(文津出版社、一九九一)一六二頁所引の原文は「梆子秧腔、即崑弋腔、與梆子亂彈腔俗皆稱梆子腔、是編中凡梆子秧腔則簡稱梆子腔、梆子亂彈腔則簡稱亂彈腔、以防混淆」。
- (18) 前掲注(17) 孟繁樹氏著書一六八頁。
- (19) 前掲注(17) 孟繁樹氏の見解による。王錦琦・陸小秋兩氏

「浙江亂彈腔系源流初探」(『中華戲曲』第四輯、一九八七)も同様の見解を採る。尙、この問題については諸説紛々として未だ定説を見ておらず、例えば張庚・郭漢城兩氏『中國戲曲通史』第四編「清代地方戲」(中國戲劇出版社、一九八一、一二二頁)は、『綴白裘』における梆子腔とは花部の總稱であるとし、寒聲氏「關於山陝梆子聲腔史研究中的一些問題」(『中華戲曲』第二輯、一九八六)は「山陝梆子」と「曲牌體」「民歌小曲」の二種であるとする。

(20) (21) 前掲注(19) 王錦琦・陸小秋兩氏論文。

(22) 原文は「一日者小集田商山大守署、商山久官隴右、耳熟秦聲、引余共欣賞之。余以苦顛胸辭。小惠故與余習、乘間請曰『君固識曲聽真者、乃亦復爾耶』。叩以故、曰『君試抑志暫傾聽之、數闋而後、仍以爲不入耳、麾某等去未晚也』。心異之、曰『子姑出所長以試』。比登看場、甫發聲、覺小異、再聽之、其聲清而揚、中商調。有頃換羽移宮、穿絲咽革、纏肩繞版、變態無方、盡一日夜始畢其技。

(23) 原文は「余憶幼時隨先子觀村劇、前一日演『雙珠』『天打』、觀者視之漠然。明日演『清風亭』、其始無不切齒、既而無不大快。鑼鼓既歇、相視肅然、罔有戲色。歸而稱說、浹旬未已。彼謂花部不及崑腔者、鄙夫之見也。

(24) 原文は「梨園共尚吳音。花部者、其曲文俚質、共稱爲亂彈者也、乃余獨好之。蓋吳音繁縟、其曲雖極諧於律、而聽者使未觀本文、無不茫然、不知所謂。…花部原本於元劇、其事多忠孝節義、足以動人。其詞直質、雖婦孺亦能解。其音慷慨、血氣爲之動盪。郭外各村、於二八月間、遞相演唱、農叟漁

乾隆三十六年版『綴白裘』七編、八編の上梓とその改訂(根ヶ山)

父、聚以爲歡、由來久矣」。

(25) 原文は「其中大排場、褒忠揚孝、實勉人爲善去惡、濟世之良劑也。小結構梆子秧腔、乃一味挿科打諢、警愚之木鐸也」。

(26) 原文は「余因披是編而閱之、知其類有二焉。一則叶律和聲、俱按宮商徵角、而音節不差。一則抑揚婉轉、佐以擊竹彈絲、而天籟自然。宜於文人學士者有之、宜於庸夫愚婦者亦有之、是誠有高下共賞之妙、較之『白裘』五集頓覺改觀。則六集之舉、勢不容已」。

(27) 原文は「若夫弋陽梆子秧腔則不然。事不皆其有徵、人不盡屬可考。有時以鄙俚之俗情、入當場之科白。一上豔麗、卽堪捧腹。此始如東烘相對正襟捉肘、正爾昏昏思睡、勿得一諛諧訕笑之人、爲我羯鼓解穢。其快當何如哉」。

(28) 原文は「俗傳錢氏『綴白裘』外集有秦腔。…其論亦確」。